

神奈川県立子ども医療センターオレンジクラブ

ボランティアニュース



200号記念拡大号 2020年6月号

発行 神奈川県立子ども医療センター オレンジクラブ事務局
編集責任者 ボランティアコーディネーター 加藤 悦興
〒232-8555 横浜市南区六ツ川 2-138-4 Tel. 045-711-2351 (代表)
ホームページ <https://orangeclub.kcmcvolunteer.com>
ブログ <https://blog.kcmcvolunteer.com>
e-mail kcmcvolunteer@kanagawa-pho.jp

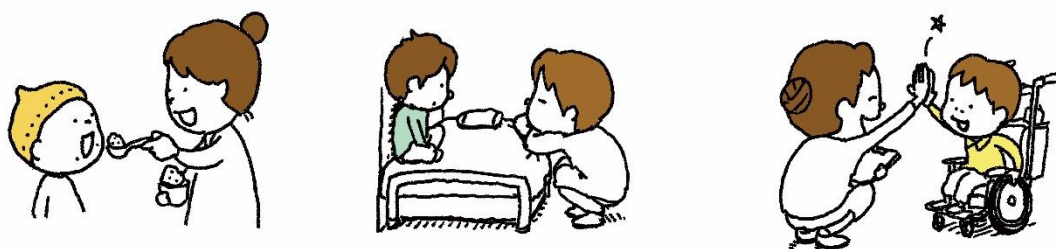
子ども医療センターの長い歴史を支えるボランティア活動

副院長兼看護局長 西角 一恵

子ども医療センターが設立 50 周年を迎える今年度、副院長兼看護局長として 2 年ぶりに異動してまいりました。小児看護を目指して、新卒で子ども医療センターに入職し、長い期間、小児看護に携わることができ幸せだと感じています。

子ども医療センターのボランティア活動は、設立 5 年後の昭和 50 年から開始され長い歴史があります。私が子ども医療センターに入職した時には、既に多くのボランティア活動が活発に行われていました。

子ども医療センターでは、300 人以上のボランティアの皆さんが活動して下さっています。ボランティアの皆さんは、通院や入院を余儀なくされる子ども達とその家族にとって、「専門職ではないひと」として、さりげない配慮で緊張を和らげ、安心や楽しさを提供して下さっています。



活動も多岐にわたり、外来グループは受診のお手伝いや、受診で頑張った子ども達に折り紙で作った指輪や腕時計をプレゼントして下さっています。受診のたびに、その折り紙を楽しみにしている子ども達が大勢います。季節飾りグループは、お雛様やこいのぼり、クリスマスツリーなど、季節感が感じられるよう院内の飾り付けをして下さっています。他にも沢山の活動をして下さっていて、「折り紙の指輪や腕時計」や「看護の日」の記念行事に使う「小さな看護師さんのユニホーム」は作業グループ、縫製グループの作品です。

新型コロナウイルスの関係で、現在、子ども医療センターではボランティア活動が制限されています。そんな中でも、できることを考え、診察が始まる前の早朝に会計カードを一枚一枚消毒して

下さっているボランティアさんの姿に、こども医療センターは本当にボランティアの皆さんの活動に支えられていると実感させられます。

時代のニーズに合わせてボランティア活動を柔軟に拡大して下さい、特に「きょうだいお預かり」の開始は大きな取り組みであったと感じています。スタッフの頃、入院している患者さんのお母さまから、『〇〇の弟が「冷蔵庫」の名前を知らなかった。どれだけ弟に関わっていなかったのかとせつなくなかった・・・』と伺ったことがありました。医療者も大切に考えている入院しているこどもの「きょうだい」支援をボランティアの皆さんも大切にして下さっていることを心強く思います。

振り返ると、ボランティアの皆さんの活動は、患者さんのみならず職員の私たちをも支え、励ましてくれるものでした。

私自身もスタッフの頃には業務に追われ、辛い治療に向き合うこどもの傍らに寄り添う時間が捻出できず、ジレンマを抱えることも多くありました。そんな時には病棟担当のボランティアさんが、ゆっくりこどもの傍に寄り添って、こども達の不安緩和の手助けをしてくださいました。こども達の不安の緩和だけでなく、患者さんに寄り添う時間が作り出せない職員のジレンマを救ってくださる存在でもありました。

こども医療センターには、『あなたの「げんき」と「えがお」のために、みんなでちからをあわせます』というこども向けの理念がありますが、ボランティアの皆さんの活動に触れる時、「みんなでちからをあわせる」という意味を強く実感します。

ボランティアの皆さんは、センターにとって、院内で働く専門職同様、大切な人材であり宝です。こどもたちの応援団として、これからもずっとこどもの「げんき」と「えがお」を共に支えていきたいと思っています。



「ボランティアニュース200号達成！」

オレンジクラブ代表 三木美雪

ボランティアニュースが、2020年6月号で、記念すべき200号となりました。100号記念は2012年2月号でした。あれから8年の月日が経過いたしました。100号記念の発行以前からHPを担当してくださっている林さんの記事をご紹介します。ボランティアニュースの始まりの物語です。

『前こども医療センター所長の後藤彰子先生が始められたボランティアニュースが、旧本館の総合待合(まだ掲示板もなく)に貼られていたのを思い出します。こども達と動物のかわいいイラストを配置したカラー刷り 1 ページのボランティアニュースでした。1 年半ほどしてボランティアコーディネーターに就任された梶山さんに引き継がれました。そして新館に引っ越しする 2005 年 12 月に「神奈川県立こども医療センターオレンジクラブボランティアニュース」として新たな紙面で発行される事になりました。』 (ボランティアニュース 2012 年 2 月号 100 号記念によせて・林美恵子) より抜粋

オレンジクラブのボランティアニュース 1 号は、元所長後藤彰子先生により (2003 年 10 月頃と推測) 発行されました。私達ボランティアが慣れ親しんでいる現在の紙面は 2005 年 12 月第 27 号から、初代ボランティアコーディネーター梶山祥子氏により始まりました。現在は、コーディネーターの加藤悦興氏に引き継がれています。

ボランティアニュースは、**17 年間**毎月休まず発行されてまいりました。毎号の内容も写真入りで、活動・イベントを紹介するものから、ボランティアさん自身の活動に寄せる思い、患者さんご家族からの暖かい励ましのお言葉、ボランティア研修会の講演内容、またセンターの医師、看護師の方々、総務局の方、さらに横浜南養護学校の先生方にも原稿をお願いしてまいりました。皆様ありがとうございました。また、以前使用していた星の魔法の杖を持ったかわいいクマのイラストは、ボランティアの草野勝美さんが描いてくださいました。これからも私達ボランティアが大切な情報を得るため、また情報発信の場として、オレンジクラブニュースを皆様にお届けしてまいります。



現在世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るっています。こども医療センターの職員の皆様も今までにない医療体制の中、日々奮闘されていらっしゃると思います。心より感謝いたします。私達ボランティアも、以前と全く同じ活動をする事は難しくなっています。緊急事態宣言が解除され、ボランティアの安全安心を確保しながら段階的に活動を再開してまいりたいと考えております。患者さん、患者さんご家族の皆様と繋がって行けるよう病棟にDVDをお届けしたり、今までにない新しい活動にも挑戦していきたいと思っています。

ズーム (Zoom) を使用してのテレビ会議も試してみたいと考えています。コロナウイルスによる困難な課題がありますが、ボランティア皆さんの知恵を結集して活動を再開してまいりたいと思います。



「ボランティアさん」という存在を感じて

きょうだいお預かり保育士 小林 二美江

今日はボランティアコーディネーターの加藤さんがお休みです。ボランティアルームはガランとしていて私一人が何やら作業をしている。こんな状況を誰が想像したでしょうか・・・

4月7日に緊急事態宣言が出され13日から全てのボランティアの当面自粛が決まりました。いつもこの部屋で患者さんやそのご家族の為に、想いを込めて又信念をもって活動されているボランティアさんの活気あるお声が聴けないのはこんなにも寂しく、時間が止まってしまったような感覚になるものかと、思わず作業の手も止まってしまいます。

4月13日からは外来や待合室の絵本の完全撤去、プレイルームも全て閉じられました。そんな中、私はボランティアルームで絵本を整理したり、外来に立ったり、正面玄関のお花の水やり、重病棟での衣類の整理を手伝わせていただいたりしましたが、私の出来る事などはほんの些細な事です。ただ私なりに感じたことがありました。

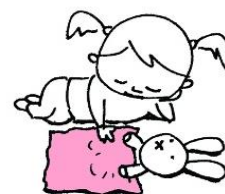
外来に立たせていただいた時は総合案内の方を通してボランティアさんの気配りの心を知り、自分の視野の狭さを思い知りましたし、患者さんご家族の大変さを少しでも軽くして差し上げたい、少しでもお役に立てればとのボランティアさんの想いを感じることができたのは大きな事でした。

そして園芸ボランティアの方々のお手入れの大変さを実感しました。暖かくなり始め、雑草の勢いはすごいものがあります。どこもかしこも雑草がこの時とばかり生き生きと伸びているのです。今まで雑草など意識した事がなかった自分に気付き、気が付く事などない程きちんとお手入れして下さっていたボランティアさんのご苦勞に想いを馳せました。先日職員の皆さんが屋上と重心のお庭の草取りをお手伝いして下さった時、草取りをしながらある職員の方が「この大変な作業をボランティアさんはいつもして下さっていたんですね。」とお話されていました。

重心の衣類の整理では大量の衣類をお名前ごとに分けるのはかなり大変な作業でした。職員の方が「ボランティアさんはきれいに向きも揃えてきちっと入れて下さるんです。凄いですよ。」とおっしゃっていました。その心配りは職員の方がすぐにそのお子さんの衣類を手にとれるようにという配慮からでしょう。人目にはつかないところでも縁の下の力持ちのように支えて下さるボランティアさん達のなんと誇らしくそして輝いているのでしょうか。

きょうだいお預かりはというと2月26日より活動が中止になりました。私達保育士は各階の玩具や絵本の消毒をして回りました。その間も何とかプレイルームで待っているお子さんが寂しく待たないように、預からずとも傍にいられないか、話し相手になるだけでもできないかと模索していましたが、ソーシャルディスタンスが強く叫ばれるようになりそれも叶わなくなりました。コミュニケーションがとれないというのはなんと辛い事でしょう。外来で泣き叫んでいるお子さんがいても声をかけていいものか躊躇し、折り紙をあげたりする事も、「ママと一緒にあっちのお椅子でご本読もうよ」と手をつなぐこともできない。なんてことだろう…と愕然とし、この感染症の恐ろしさを痛感しました。

そして5階のプレイルームも全て閉じられてしまった事の経緯をきょうだいお預かりのボラ



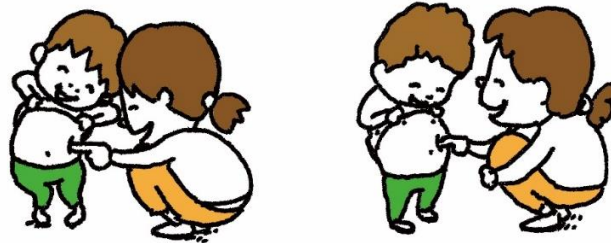
©ヨシサキ

ンティアさんに報告をしたところ、皆さんより「きょうだいさんたちはどうしているのだろう…」
「お母さんたちはきっと大変な思いをしているに違いない…」「こんな状況泣けてきます」と心配するお声やお返事を頂きました。ありがたい事です。皆さんがこども医療センターに通う方たちの事を思っていて下さる事がとても嬉しく心強く感じました。

全てのボランティアさんの想いが患者さんやご家族、又医療関係者の方々に早く届けられる日が来るように祈るばかりです。

今回の状況は私たちに様々な気付きを与えてくれているのではないのでしょうか。私自身、自分を見直す時間を与えてもらったとも思っていますし、「気付き」の大切さや、ボランティアさんの存在の大きさ、人との繋がり大切さをこんなに身に染みた期間はありませんでした。

このような素晴らしい環境を作って下さっているボランティアの皆さんと活動を共にさせて頂くことを誇りに思っています。そして改めてボランティアさんに敬意を表して「いつも本当にありがとうございます！」



ぽぽんた通信 32号

きくちゃん

新型コロナウイルス感染の恐怖はまだ収まっていない。外出自粛規制で巣ごもり状態の人も多いだろう。近況のお知らせの中に家の片付けや断捨離をした、という人も数人いたようだ。そこでキクちゃんも押入れ奥の木箱、空箱の整理片付けを始めた。これらの空き箱は全部頂いた物だ。そーめんの空き箱、高級な清酒、洋酒の空箱、高級タオルの箱、高級菓子の箱等等、これらはバルサ材や圧縮パルプが素材になっている。！これで何作ろ！

少し早いけどクリスマスグッズの制作に取りかかった。

まず夫が糸のこやヤスリ、キリでモミの木（クリスマスツリー）や雪だるま。コーヒーフィルターケースを裁断。それにキクちゃんが絵を描く。画集やデザイン集を参考にして書き始めた。いつの間にかモミの木は12本、雪だるまは5個、コーヒーフィルターケースは5個出来た。既に幾つかは差し上げてしまったけど、有るだけを並べて見てもとても楽しい。しばらくは我が家の棚に飾っておこう。冬のバザーに出してみようかな。売り物にしないつもりだから、欲しい人がいたら貰ってもらおう。この子たち（モミの木や雪だるま）の親の気分だ。



自粛の中でのこどもたちの楽しみ

クリーン病棟 保育士 松田温子

5月25日、神奈川県でもようやく非常事態宣言が解除されましたが、自粛した生活は続くと思われる。当センターでも、12時間可能であった面会時間が、14時から20時の中の2時間（現在は4時間）に減らされたり、ボランティア活動が中止されたりと、治療のため長期入院を余儀なくされているこどもにとって、ストレスがかかる生活となっています。

クリーン病棟では、以前はほぼ毎日、ボランティアの方々のお世話になっていました。しかし現在は中止され、日々こどもたちは、寂しさや辛い治療に向き合いながら生活を送っています。私たちスタッフは出来るだけたくさんの子どもたちに遊びが提供できるように話し合い調整を行っておりますが、保育士1人ではなかなか思うようにはいかない現状があります。

そのような中、今回、病棟で、ファシリテードッグのアニーが所属するシャイン・オン！キッズから寄贈されたiPadを使用し、森田さんやアニーも参加してイベントを行いました。一つは、ファシリテードッグ訓練中の子犬タイとマサと、リモートを通して遊びました。画面を通してタイやマサに対し、こどもたちが絵本の読み聞かせをしたり質問したり、歌を歌ってあげたり、iPad越しに「回れ」というと、画面の中でちゃんとタイやマサが答えてくれたり…、こどもたちは歓声をあげながら満面の笑みを浮かべとても喜んでいました。

もう一つは、プレイルームにスクリーンを設置し、リモート紙芝居（ブレーメンの音楽隊）を行いました。大画面に映る紙芝居はとても迫力があり、大画面を見ながら会話を楽しむことも出来ました。この二つのイベントは、毎日変化が少ない入院生活の中でこどもたちに笑顔を運んでくれたと思います。依然続くと思われる自粛生活の中、今後もリモートを使用するプチイベントに大いに期待しています。本当にありがとうございました。これからもよろしく願い致します。（^-^）



病室で iPad を利用して訓練犬に本を読んであげています。
アニーも一緒でした。

「新しいボランティア活動様式」に向けて

ボランティアコーディネーター 加藤 悦與

ボランティアニュース 200 号は、『新しい生活様式』『新しい活動様式』を模索する記念すべきスタートになりました。作業グループの方が作った短冊を正面玄関と管理棟への通路に置き、七夕飾りが始まりました。短冊に書いてあった願い事を少し載せさせていただきます。

「家族の全員でピクニックができます様に」「みんなで元気な毎日がおくれますように」
「みんながどこへでも行けます様に」「健康にすごせますように」「早く退院できますように」
「コロナがおわりますように」・・・・・・・・

2月以降、オレンジクラブの方をはじめ、市民の皆様方のあたたかいお気持ちに沢山触れてきました。私はそれを、病棟のお子さんやご家族や職員の皆様にお届けする仕事をしていました。九州の湯元さんは、たくさんの木の手作りおもちゃを送ってくれました。クリーン病棟の子どもたちにお持ちしました。たくさんいただいていますので、みんなで遊ぶ時が来ることを願っています。縫製の方が作ってくださったり、病院にご寄付頂いた沢山のマスクは、1個ずつ袋に入れ、病棟の患者さんやご家族、そして職員に届けました。病棟を回り終えた時に、保育士さんがボランティア室に来ました。「プレゼントのマスクをプレイルームに置いたら『お母さんが来た時無くなっていたらどうしよう』と心配しているお子さんがおり、追加でいただけますか？」と取りに見えたのです。その温かさに触れ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。人の気持ちは繋がっていく事をしみじみ思いました。

ある時、医師がボランティア室を訪れて「屋上の草がぼうぼうだよ。ボランティアさんが来る前に草だけでも皆で取ったらどうかな。企画してみて。」と言いました。確かに草いっぱいでした。金曜日の夕方2週に渡り1時間ずつ、延べ40人の職員が草取りに協力してくれました。職員の行動にも感謝した次第です。



左上：木のおもちゃ
右上：たくさんのマスク
左下：屋上での草取り
右下：重心施設での草取り

病棟にボランティアさんが入れない状況下で、シャイン・オン・キッズの皆さんからオンラインイベントの提案がありました。器材の寄付もあり病棟で開始しました。画面の奥のワンちゃんたちに『おすわり』と話しかけて、お座りした犬を小さいお子さんたちがキラキラした目で見ていました。一方で『ほんとうのおとなのひとと、いっしょにうたをうたいたかった。』という小さな男の子の言葉にも心が動かされました。ぽぽんたさんたちの『ろうそくポン・もひとつポン♪これからはじまるおはなし会 ♪』が待ち遠しいです。

また5西病棟では、オンラインで身体を動かすイベントを企画していました。今まで体育館でやっていたフットサルですが、3月以降全くできませんでした。オンラインで「タオルを使って体操しよう」というものです。密を避けて、2回に分けてプレールームで入れ替わり制。フットサル選手の久光氏と藤原氏はゆっくり話し、間を取り、画面の工夫もしながら話しておりました。ちょっとした運動不足・交流不足の解消になったようです。

新しい活動様式は、新たな形で社会と病院のこどもたちを繋ぎます。「閉ざされた」という印象から、「開かれ、繋がる」仕組みがあります。それは、個人情報保護という大切なことをクリアしながら進めていかなければならないことでもあります。「ふれあう事」を大切に活動の意図をもちながら、病棟・病院での安全・安心な活動をボランティアさんや病院の皆さんと一緒に進めていく事が、今の私の役目かと思っています。

(写真は正面玄関のお花を手入れしている外来ボランティアさん) です。



お知らせ

1. ボランティア運営会議は7月に予定しています。
人数制限があるため ZOOM オンライン会議を検討中です。
2. 雑誌「小児看護」に6月号から1年間連載します
題目は「小児医療施設ボランティアコーディネーターのお仕事～子どもも家族も笑顔あふれる病院になあれ」ボランティア室にありますので、ご覧ください。
3. 現在の活動は、外来（同時に2人程度）・園芸・吊るしびな・手芸・縫製・作業グループ・フラワーアレンジメント等です。集まったの活動は10人程度にしています。徐々に再開しています。
4. **感染防止の基本**
「身体的距離の確保」「マスクの着用」「手洗い」を継続する。
「3密」、すなわち密集・密接・密閉を避ける
5. オレンジクラブ各リーダーの方に、この状況下での新しい活動様式をグループ内でも話し合ってくださいようお願いしております。

*次号は、皆さんのご意見や感想等を記事にして200号特集第二弾を考えております。

原稿の募集（コメントでも可）を致します。締め切りは6月25日（木）

メールアドレス：kcmcvolunteer@kanagawa-pho.jp

掲載のイラストはヨシタケシンスケさんからご寄付頂いたものです。